

Title	神霊を生きる人びとの「現在」：南インド・ケーララ州のテイヤム祭祀の実践者たちをめぐる民族誌的研究
Author(s)	竹村, 嘉晃
Citation	大阪大学, 2012, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59334
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	たけむら じゅん けい 竹村 嘉 晃
博士の専攻分野の名称	博 士 (人間科学)
学位記番号	第 25304 号
学位授与年月日	平成24年3月22日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 人間科学研究科人間科学専攻
学位論文名	神霊を生きる人びとの「現在」 —南インド・ケーララ州のテイヤム祭祀の実践者たちをめぐる民族誌的研究
論文審査委員	(主査) 教授 栗本 英世 (副査) 教授 小泉 潤二 教授 中川 敏 准教授 森田 敦郎

論 文 内 容 の 要 旨

本論文の目的は、南インドのケーララ州北部地域のローカルなヒンドゥー教徒たちが祀るテイヤム祭儀という場において、自らが霊媒となって神霊の役割を担う不可触民の人びとに焦点をあて、彼らの社会的状況と実践活動との相互関係を照射し、現代社会の動態や祭儀を取り巻く巨視的な位相と、彼らの生活世界や経済活動、社会とのつながりといった微視的な要素がいかに実践レベルと関係し、影響を与えているのかを民族誌的に解明することである。

この作業を通じて、本論文では、不可触民の男性が霊媒となって実践する神霊祭祀を「神秘化」することなく、審美的要素や芸態だけを語る芸能論に陥るのではなく、「浄」「不浄」のカースト・ヒエラルキーやイデオロギーにもとづく「虐げられた人びと」として枠付けすることなく、彼らの生活世界に立ち、現在をいきる生のあり様に共鳴することを試みた。このような意図のもと、本論では以下の議論を展開した。

第一章では、テイヤム祭祀の位置づけを明示する目的で、ケーララに伝承されている文化的パフォーマンスを概観し、テイヤム祭儀の基盤となるヒンドゥー社会について記述した。ケーララでは、カースト制度が強固に保たれ、インドの他の地域ではみられなかった序列階梯が厳格に存在していた。儀礼的位階上の最高位を占めるのは、ナンブーディリとよばれるバラモンであり、彼らを頂点に不可触民を最下層とする「浄」「不浄」の概念によって序列化された秩序を保っていたと述べた。そして、テイヤム祭祀は、一年に一度、「不浄」とされた不可触民の男性の身体を介して神霊が人びとの前に顕現し、祝福と託宣を与えるものであり、彼らは長きにわたって社会的地位の低い立場であったと指摘した。また、第一章では、テイヤム信仰についても概観した。テイヤム祭祀の起源と神霊の分類、祭儀が行われる場、テイヤム神となる実践者たち、祭儀を遂行する太鼓奏者や神官などのその他の担い手たち、実践者たちの伝承形態などについて記述した。また、祭儀の次第を理解するために、カルナーカラン・ベルワンナーンのグループを事例に、ワイナートゥ・クラヴァン神のテイヤム祭儀の模倣を、実践者たちの行動に焦点をあてて記述した。

第二章では、不可触民が霊媒となって顕現するテイヤム神が、異なる媒介のもとで、宗教的文脈から逸脱した複数の場に表れている今日の状況を考察した。第一節では、テイヤム祭儀に関する「知識」や「価値づけ」が活字メディアを通じて浸透してきたことを明示し、植民地時代の人植者たちが「悪魔」や「悪魔祓い」

と記述したテイヤム神の今日におけるイメージは、一部の研究者たちの解釈と「アート」という枠組みが複合的に結びついて生成されたものであることを指摘した。第二節では、インド社会の主たるメディアとなってきた民俗メディアという枠組みを呈示し、テイヤム神という霊媒が左翼的思想と接合しながら、政治的文脈では「抵抗」のシンボルとして流用され、芸術的文脈においては「虐げられた人びと」として配役されている状況を論じた。第三節では、日常の生活世界において繰り返して再生産されているテイヤム神のイメージに着目し、印刷、視聴覚、電子メディアの文脈からその受容動向を検討した。そして、テイヤム信仰に関する人びとのメディア経験の近代化の道筋を探りながら、その過程において、テイヤム祭祀のイメージが多様な媒体と接合しながら多元化、複合化し、宗教的文脈といった場所性に依存することなく、様々な空間で流用されている実態を明らかにした。

第三章では、テイヤム実践者という祭儀の主体に焦点をあて、彼らの実践活動を生活の場から捉え直し、テイヤム祭祀の活性化が彼らの生活や社会環境にいかなる変容をもたらしているのかを明らかにした。第一節では、ワンナーン・カーストのテイヤム実践者であるジェイという若者を照射し、ガルフへの出稼ぎを思い悩んでいた彼が、ムッタパン神の実践者としてその名が広く知れわたるまでの経緯をライフヒストリーから明らかにした。そして、彼の生活が変化した要因には、ムッタパン信仰の隆盛があることを指摘した。第二節では、近年、著しく隆盛するムッタパン信仰について、祭儀の概要を述べた上で、その信仰が州外の都市部やガルフにまで拡大している実態を描き出した。そして、信仰の隆盛の背景にあるガルフ出稼ぎ移民がもたらすカネの流入を微視的に記述した。第三節では、ジェイの実践活動の転軸に着目し、信仰の隆盛が彼の経済状況や社会的地位、他の実践者グループとの関係性にどのような影響を及ぼしているのかを考察した。そして、テイヤム実践者という彼らの伝統的職業が、今日では、豊かな生活を営む「仕事」として、すなわち、彼らに「文化資源」としての位相をもたらしていることを指摘し、それを維持するために、ジェイが非互酬的な新たな相互扶助の関係を他の実践者たちと構築していることを明らかにした。

第四章では、テイヤム祭祀を規定する外在的な諸条件が実践レベルにおいていかなる影響を及ぼしているのか、祭儀を担う上で実践者たちが認識している内在的な諸要素とそれらの変容を微視的に考察した。第一節では、ムッタパン信仰の隆盛にともない、若年層の実践者たちが「稼げる仕事」を求めて実践のアリーナへ参入してきた近年の動向とその影響について論じた。顕在化している、若手実践者たちの祭儀における問題を事例から検討し、学習過程の不足による知識の欠如と、祭儀の関与を通じたアルコールの消費に関する問題を指摘した。第二節では、テイヤム祭儀の伝承における近代教育の影響について検討した。共産党政権が導入した教科書変更により、サンسكريット語やブラーナといった古典的教養を身につける機会を失った人びとが今日の祭儀を支える参拝者であることを指摘した。第三節では、祭儀の実践そのもののあり様が、いかに社会状況に呼応する形で変容しているのか、祭儀の行程で重要な役割を担う「トータム（祭文を唱える）」「カラーシャム（ステップを踏む）」「ヴァーチャル（託宣を語る）」といった身体技法と語法を照射し、その変容を実証的に考察した。

結果として、本章では、テイヤム神という神霊の役割を「受け継ぐ」人びとが時代と共に移り変わりながらも、社会的に構築されたテイヤム祭儀の実践の場を通じて、自らの位置を確認し、自尊心の獲得や豊かな生活を送るための生のあり様を追求していることが明らかとなった。

以上の議論を通して、本論文では、テイヤム祭儀のような文化的パフォーマンスに対して、現前するパフォーマンスの様式上の特性へ偏重したテキスト中心主義的なアプローチと、祭儀を支える社会的構造やその動態を考察する文脈主義的なアプローチとの乖離を埋めるための、民族誌的記述による「ひと」中心のアプローチの有益性を主張し、人びとの生活世界の広い地平のなかに様々な位相と接合しながら受容されているその動態を記述することの重要性を提唱する。

論文審査の結果の要旨

本論文は、南インド・ケーララ州北部で、指定カースト（不可触民）の人びとによって伝承されてきた神霊祭祀であるテイヤムの今日的な動態に関する民族誌である。テイヤム儀礼の歴史・文化的概要が概説されたのち、ケーララの人びとが置かれている今日の大状況——経済の自由化、湾岸地域への出稼ぎ、メディアとコミュニケーション技術の発展など——と、共産党政権下にあるというケーララ州の特殊状況のなかで、テイヤムがいかに変容してきたか、そして儀礼の実践じたいは、変容しつつも世代を超えて伝承されているのか、詳細に論じられている。経済的な活況のなかで、地域コミュニティとつよく結びついていた儀礼が個人化し、活性化するありさま、カースト・ヒエラルキーにおいて最下層に位置付けられていた人びとにとって世襲の儀礼的行為であったものが、今日ではかなりの程度の金銭的収入と誇りを提供する「仕事」になっていることなどが、多数の事例やエピソードを踏まえつつ、実証的かつ説得的に論じられている。学位請求者自身の言葉によると、本論文の目的は以下のごとくである。「不可触民の男性が霊媒となって実践する神霊祭祀を『神秘化』することなく、審美的要素な芸態だけを語る芸能論に陥るのではなく、『浄』『不浄』のカースト・ヒエラルキーやイデオロギーにもとづく『虐げられた人びと』として枠付けすることもなく、テイヤム実践者たちの生活世界に足場をおく民族誌的記述によって、現在をいきる彼らの生のあり様を理解することを試みた」。審査者一同は、この目的は十分に達成されていると判断する。また、本論文は、ケーララ州のテイヤム儀礼という、個別特殊な事象に注目しているにもかかわらず、現代インドの社会・文化・経済的動態の一側面をみごとに描き出している点でも、高い評価に値する。

本論文は、あしかけ6年間にわたった22カ月のフィールドワークの成果である。現地調査の過程で、著者はある儀礼実践者の家族にいわば「弟子入り」し、身体技法の習得過程や近年の変容についてつぶさに参与観察する機会をえた。このテーマに関する記述と分析は、高度に実証的かつ「厚い」ものであり、本論文の白眉といえる部分である。また、ダンス・アンソロポロジー、舞踊・芸能研究、人類学的な身体論、南アジアに関する人類学研究、インドの地域研究など、本論文に関連する諸分野の文献レビューも十分におこなわれており、その成果は本論文全体の構成にたくみに生かされている。以上は、人類学の調査者・研究者としての著者の力量を示すものである。

本論文は、儀礼、芸能、舞踊に関する人類学的研究、およびインド研究に対する貴重な貢献であり、その学術的意義は、論文審査担当者全員が一致して高く評価するものである。

以上の理由から、本論文は博士（人間科学）の学位論文として十分価値あるものと認めるものである。